

An Analysis of Emergency Cases Treated at the Department of Otolaryngology, Fukuoka University Hospital in 2004

Kaoru MATSUI, Takafumi YAMANO, Hirofumi HARADA,
Yoshiki ONISHI, Takayuki SUETA, Akihide IMAMURA,
Kensuke SHIBATA and Toshihiko KATO

Department of Otolaryngology, Fukuoka University School of Medicine

Abstract : We studied 297 outpatients who had an after-hours emergency medical examination at our department between January 1, 2004 and December 31, 2004. The time they visited, the varieties of diseases and the proportion of patients that required emergency hospitalization were consistent with the reports provided by other clinics; however, the number of the patients by month was not 81.1 percent of the patients were from within Fukuoka City a western part of the city. Some patients were even from outside of the Fukuoka City; thus, it is concluded that our department plays a very important role in the field of emergency otolaryngology in the western part of Fukuoka city.

Key words : Emergency, Fukuoka City, Otolaryngology

平成16年の当科における救急外来の受診状況

松井 郁 山野 貴史 原田 博文
大西 克樹 末田 尚之 今村 明秀
柴田 憲助 加藤 寿彦

福岡大学医学部耳鼻咽喉科

要旨 : 平成16年1月1日から12月31日に当科を受診した救急外来(時間外外来)患者297人を対象とした。来院時間、疾患別の内訳、緊急入院率は他施設の報告と一致したが、月別受診患者数は他施設の報告と一致しなかった。福岡市内からの受診が全体の81.1%で、福岡市内でも西部方面が75.9%であった。市外からの受診もあり、当科は福岡市西部および、その近郊の耳鼻咽喉科救急に対し重要な役割を担っていると考えられた。

キーワード : 救急外来, 福岡市, 耳鼻咽喉科

はじめに

当科では、福岡大学病院発足以来、耳鼻咽喉科領域における救急疾患に対し、1次から3次までの対応を行っている。今回、我々は平成16年の救急外来に対し、集計を行い若干の知見を得たので、文献的考察を加え報告する。

対 象

平成16年1月1日から12月31日までの間に当科を時間外受診した患者延べ595人のうち、初回受診であった297人を対象とした。年齢分布は0歳から86歳、平均年齢は28.7歳であった。性別は男性が149人、女性は148人。な

お、時間外の時間帯は、平日が17時から翌日8時まで、土曜日は14時から翌日8時まで、日曜日および祝祭日は終日として検討した。

結 果

月別の受診患者数を図1に示す。2月、3月はやや少なかったが、その他の月では30人前後と平均した受診者数であった。対比として福岡市立急患センター耳鼻咽喉科の患者数を示す。急患センターでは1月、5月と休日が多い月に受診患者数が集中していた。

年齢の分布では、10歳未満が91人と、全体の30.6パーセントを占め、最多であった。次に20歳代の受診者が多く認められた(図2)。

曜日別の患者数を図3に示す。平均の患者数では、平日が0.7人、土曜日は1.0人、日曜・祝祭日が1.3人であった。平日に比べ、救急の時間帯が長くなる土曜日、日曜・祝祭日で受診患者数の増加を認めた。

来院時間の分布を図4に示した。2時間毎で集計を行った。17時から2時までの時間帯が219人と最も多く、全体の73.7パーセントを占めていた。その中でも21時から1時までに125人が受診しており、全体として42パーセントと高い割合を認めた。

図5は受診患者の居住地分布である。福岡市内からの受診は241人、全体の81.1%を占めていた。市内の中でも、早良区、城南区、西区の受診者は183人であり、早良区からの受診者が最多であった。上記3区以外での受診者数は、南区、中央区、博多区、東区の順であった。その他、前原市や糟屋郡、大野城市、糸島郡からも受診していた。また、帰省中、あるいは旅行中などの理由により県外からの受診もみられた。

表1 緊急入院症例

扁桃炎, 扁桃周囲炎, 扁桃周囲膿瘍	9
眩暈	4
喉頭蓋炎, 喉頭浮腫	3
鼻出血	3
咽喉頭外傷	2
深頸部膿瘍	2
乳様突起炎	1
顔面神経麻痺	1
突発性難聴	1
喉頭痛	1
縦隔気腫	1
前頭洞嚢胞	1

n=29

疾患の内訳は、年齢により内容が異なるため、10歳未満と10歳以上にわけて検討した。

10歳未満の疾患の内訳を図6に示す。中耳炎と異物が全体の78.0パーセントを占めていた。最も多かったのは中耳炎の41人で全体の45.1パーセントを占め、その大部分が急性中耳炎であった。ついで異物が全体の33.0パーセントを占めていた。異物の介在部位別は鼻腔が16人、咽頭が9人。異物の種類はビーズ、ティッシュ、消しゴムなど多岐にわたっていた。

10歳以上の疾患の内訳は図7に示す。鼻出血がもっとも多く42人と、全体の20.4パーセントを占めていた。次いで、扁桃炎、咽頭炎が32人。全体の15.5パーセントであった。その他、異物、副鼻腔炎、めまい、喉頭蓋炎などを認め、10歳未満と比べ、疾患は多岐にわたっていた。

緊急入院した症例を表1に示した。緊急入院数は29人、全体の9.8パーセントであった。扁桃炎・扁桃周囲炎・扁桃周囲膿瘍が最も多く9人、眩暈が4人、喉頭蓋炎、喉頭浮腫、鼻出血が3人であった。

考 察

耳鼻咽喉科では、昭和48年、病院開設以来、当科領域における救急疾患に対し、1次から3次まで幅広く対応を行っている。今回、我々は平成16年の救急外来患者を対象とし、月別の人数や年齢、居住地、疾患内容などについて検討を行った。

月別の患者数の検討では2月および3月において、やや人数が少ないものの、その他の月では平均的な受診人数であった。この結果が、例年と同様であるかについては、今後過去の年についての比較検討が必要である。しかしながら、石川ら¹⁾の月別患者数の報告では年末年始やゴールデンウィークに受診者が多かったとしており、今回、我々の結果とは一致しなかった。その理由の1つとして、当院から比較的近距离に福岡市立急患診療センターがあることが考えられる。年末年始やゴールデンウィークも9時から23時30分まで耳鼻咽喉科の診療が行われており、受診者数が当院より多い事はセンターの資料からも示唆される。いずれにしろ、単年の結果であり、今後他年の集計を行い検討する予定である。

年齢分布においては10歳未満が30.6パーセントと最も多く、次に20代であった。20代が多い理由としては、近隣に居住する当大学の学生が、多く受診するためと考えられた。

来院時間は、17時から3時までが219人と多く、全体の73.7パーセントを占めていた。また、その中でも21時から1時までが125人と全体の42パーセントであり、いわゆる準夜帯に多く、これは他施設の報告²⁾と同様であった。

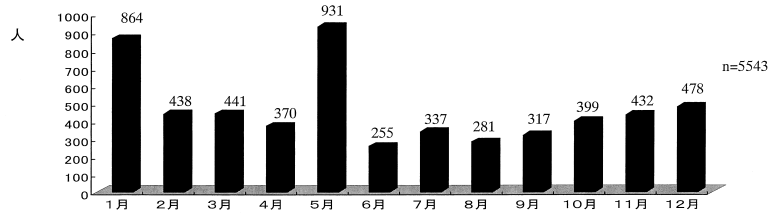
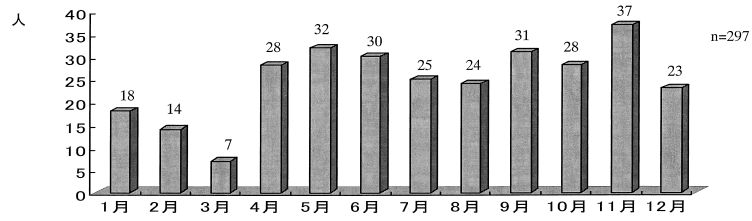


図1 月別受診患者数
(上：当科，下：福岡市立急患診療センター)

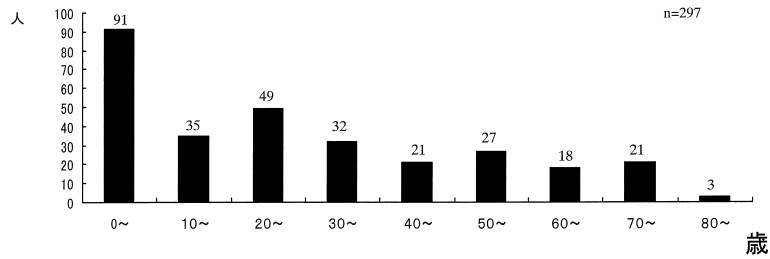


図2 年齢分布

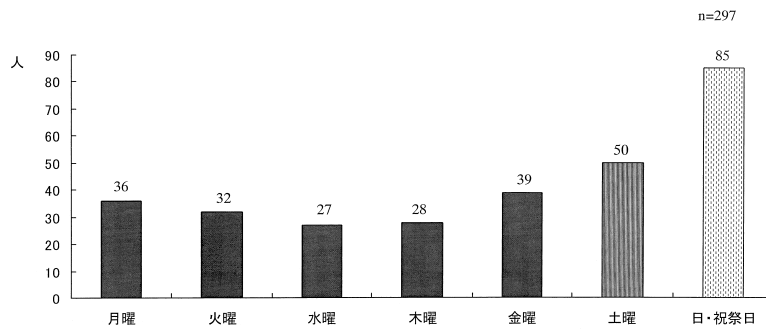


図3 曜日別患者数

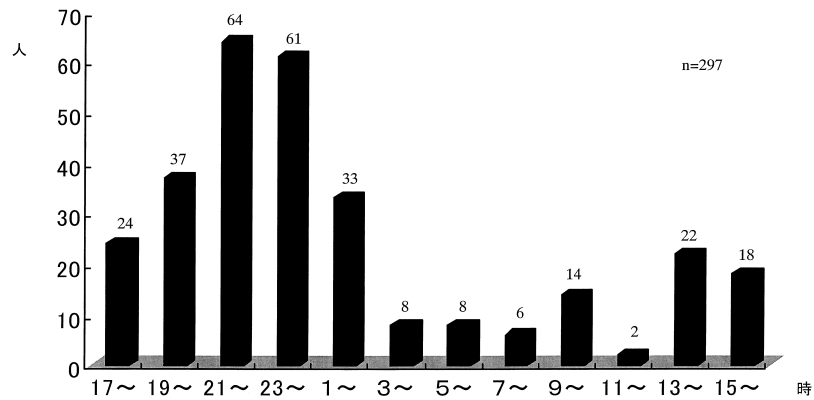


図4 来院時間分布

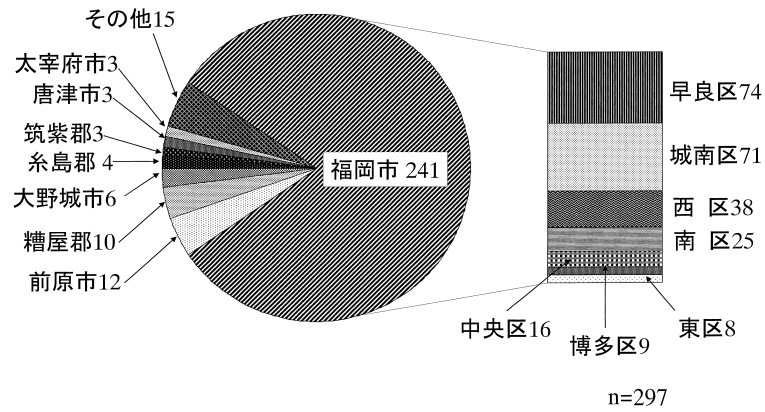


図5 受診患者の居住地分布

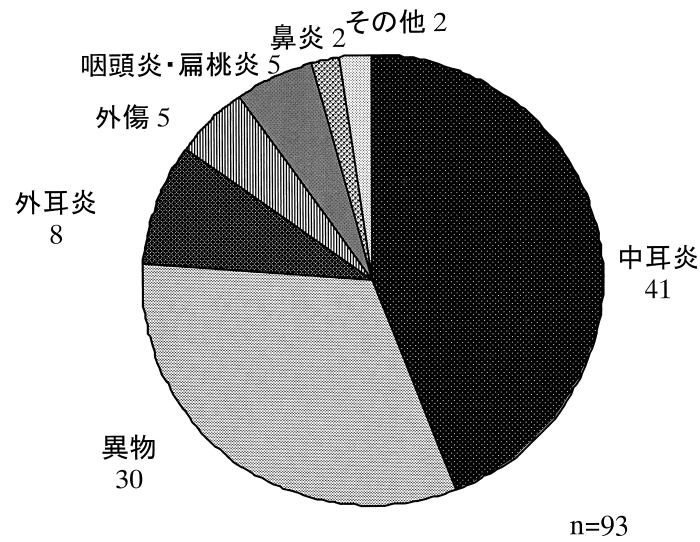


図6 10歳未満の疾患別患者数

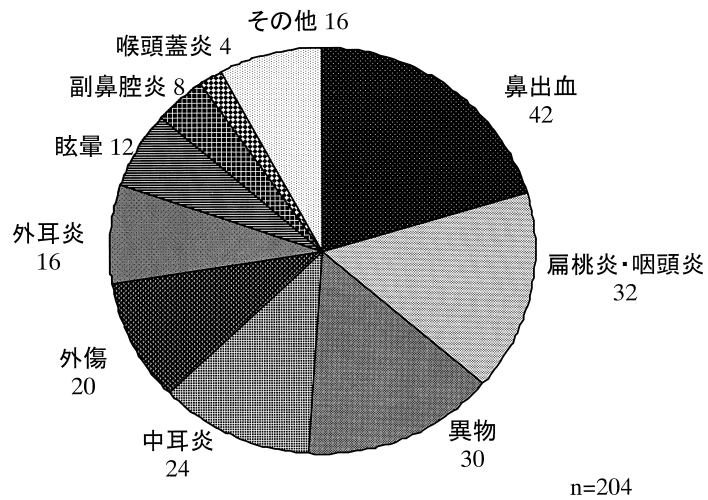


図7 10歳以上の疾患別患者数

居住地の分布では、福岡市早良区、城南区、西区の3区で全体の75.9パーセントと福岡市西部地方の受診者が多数を占めていた。当院は城南区にあることから、当然近隣からの受診が多い結果となった。このことの要因の1つとして、福岡市では北九州市のような常勤医師のいる施設による輪番制度がないため、平日夜間の救急に関しては当院を含め限られた施設に救急患者が集中しているものと考えられた。また、福岡市西部では市中病院における耳鼻咽喉科常勤医の数は少ない。しかし、人口は増加傾向にあり、鼓膜切開術や鼻出血止血処置、喉頭疾患における気道管理など、専門対応が必要な施設は限られており、当科の役割は今後更に、重要になってくるものと考えられた。

疾患別では他施設の報告³⁾と同様、10歳未満では中耳炎と異物が全体の78.0パーセントと多くを占めていた。また、異物の介在部位は鼻腔、咽頭が多かったが、種類は様でなく何らかの傾向性はうかがえなかった。

一方、10歳以上では鼻出血がもっとも多く全体の20.4パーセントを占めていた。しかし、炎症性疾患や外傷、異物などその内訳は多岐にわたっていた。

緊急入院症例は扁桃炎・扁桃周囲炎・扁桃周囲膿瘍などの扁桃の急性炎症疾患が9人と最多であった。以下、眩暈、喉頭蓋炎、喉頭浮腫、鼻出血などであった。全体をみると、咽頭・喉頭の炎症性疾患や緊急に切開排膿、気管切開などの耳鼻咽喉科的手術が必要となる可能性のあるものが、当然多くを占めていた。なお耳鼻咽喉科救急疾患における緊急入院率について石川ら¹⁾は4パーセント、安部ら³⁾は16パーセントと報告している。当科では9.8パーセントであり他施設の報告と比較してほぼ中間の割合であった。

今後は調査年度を拡大し年度ごとの比較等、さらなる詳細な検討を行う予定である。

尚、今回の検討に当たり、福岡市急患診療センターの資料を使用させて頂きました。ご快諾頂いた、同センターおよび福岡市医師会に対し、感謝の意を表します。

ま と め

平成16年1月1日から12月31日の1年間に当科を受診した救急外来（時間外外来）患者297人について検討した。疾患別の内訳は他施設の報告と一致した。

当科は福岡市西部その近郊の耳鼻咽喉科救急に対し重要な役割を担っていると考えられた。

文 献

- 1) 石川和宏, 田中秀隆, 安田豊稔, 菅原公明, 喜多村健, 森田 守: 自治医科大学附属病院救急外来を受診した耳鼻咽喉科患者の統計的観察. 自治医大紀要 16: 111-115, 1993.
- 2) 上杉恵介, 佐久間惇, 堤康一郎, 渡来潤次, 芦川和高, 竹山 勇: 当大学病院救命救急センターで取り扱った耳鼻咽喉科疾患の統計的観察. 耳鼻臨床 補9: 66-74, 1987.
- 3) 安部治彦, 井上都子: 都立広尾病院・耳鼻咽喉科の救急外来における最近2年間の集計—14年前との比較—. 耳喉頭頸 71(11): 787-791, 1999.
- 4) 田原哲也, 関谷 透, 沖中芳彦, 山下祐司: 山口大学耳鼻咽喉科急患診療の実態. 耳鼻臨床 84: 4; 533-540, 1991.

(平成17. 8. 9受付, 17.12.26受理)